

法として有効であり、また症例によっては長期的な止血も可能であると考えられた。再発症例では塞栓された血管の再開通ではなく側副路の新生や前回指摘されなかった血管の関与などによるものが多かった。

9 最近経験した異型肺炎の検討～画像中所見を中心に～

佐藤 迪夫・伊藤 竜・大橋 和政
小原 竜軌・中嶋 治彦・伊藤 和彦
塚田 弘樹

新潟市民病院呼吸器科

細菌性肺炎と非定型肺炎の鑑別は海外のガイドラインには無い本邦独自の考え方である。市中肺炎の原因微生物、特に非定型病原体の頻度が各年齢層で変わらないこと、細菌性肺炎と非定型(異型)肺炎は臨床像、胸部X線写真上鑑別が難しいこと、両者の合併がしばしば認められること、マクロライドの第1選択が有効であることから、欧米では両者の鑑別は行われていない。しかし、本邦ではマイコプラズマ肺炎は若年者層に多く、肺炎球菌のマクロライド耐性率が高いことから臨床では鑑別を行い、治療している。一方、非定型肺炎の画像所見は多彩であり、画像所見は本邦ガイドラインの診断項目から外れているのが現状である。今回は当科で最近経験した疾患非特異的で様々な画像所見を呈した異型肺炎を6症例、来院時の画像を中心に紹介する。1, 2症例目はレジオネラ肺炎、3, 4症例目はクラミジア肺炎、5, 6症例目はマイコプラズマ肺炎の症例である。これらの中には肺炎以外のびまん性肺疾患を除外しなければならない症例もあったが、いずれも非定型肺炎に対する抗菌薬が奏効し、治癒した。

10 当科における感染性心内膜炎の検討

矢部 正浩・野本 優二・山添 優
新潟市民病院総合診療科

【方法】 当科で過去6年間に感染性心内膜炎と

確定診断された6症例(男性4例、女性2例、平均年齢69才)のretrospective chart review。

【結果】 起炎菌はグラム陽性球菌5例(連鎖球菌3例、黄色ブドウ球菌2例)であった。発熱は受診前4例、入院直後までには全例で認めた。現病歴は2例が1週間以内の急性発症であり、4例が数週間から1ヶ月程度の亜急性の経過であった。発熱以外の症状は50～60代の若年者では筋骨格系症状を認め、高齢者では食欲不振や全身倦怠感などの非特異的な症状や異常行動が中心であった。基礎疾患は3例で心疾患を、3例で糖尿病を、2例で大量飲酒を認めた。入院時に4例で心雑音をみとめた。罹患弁は僧帽弁後尖3例、僧帽弁前尖2例、大動脈弁1例であった。経胸壁心エコーでは4例で疣贅を認めた。経食道心エコーは3例で実施し2例で疣贅を認めた。抗菌薬治療に加え、いずれの症例も手術を検討したが、2例は手術前に合併症(脳出血1例、急性左心不全1例)により永眠。2例は合併症により手術適応外と判断され後日永眠。1例は出血性脳塞栓の合併を認め手術適応外であったが、抗菌薬治療のみで治癒。1例は合併症も認めず治癒。

【考察】 若年者では発熱に加えて比較的限局した筋骨格系症状を呈する場合に、また高齢者では発熱と食欲不振や全身倦怠感などの非特異的な症状ないしは異常行動を呈する場合に、感染性心内膜炎を考慮する必要があると考えられた。

11 術後3年目に腹膜播種を再切除しえた上行結腸癌の1例

田中 岳・小向慎太郎・大橋 泰博
遠藤 新作*・高橋 澄雄*

新潟こばり病院外科
同 内科*

症例は68歳、男性。腹痛を主訴に平成17年11月、当院内科受診し、腹部単純撮影検査にて腸閉塞症と診断され同日入院した。腹部CT検査にて回盲部に腫瘍を認めた。大腸内視鏡検査にて上行結腸に全周性の2型の腫瘍を認め、生検にて高分化型腺癌と診断した。右半結腸切除術を施行した